

篠原幸雄からやましたゆきおへ

マンガと生きた50年

一九七〇年代、

マンガで世界を変えられると、
本当に信じていたマンガ家があった！

5



ネット配信版・新つれづれ草に掲載の「マンガと生きた50年」は、東京都江東区・森下文化センターにて2017年10月20日(金)から29日(日)の会期で開催しました。新つれづれ草マンガ展「篠原幸雄からやましたゆきおへ マンガと生きた50年」で展示した展示物を再構成したものです。

おやしマンガ同人誌

つ新つれづれ草

マンガ展

篠原幸雄からやましたゆきおへ

マンガと生きた50年

おやしマンガ同人誌「新つれづれ草」の山下幸雄は1970年少年ジャンプから篠原幸雄としてマンガ家デビューその後、マンガ家、デザイナー、編集者としての立場を変えながらマンガとの関わりを持ち続けて生きてきた。そして今再び、やましたゆきおとしてマンガを描き始めた！

入場：無料



イラスト：篠原幸雄
(著者少年ジャンプの連載「男の子の犬」)

日時：10月20日(金)～10月29日(日)
午前9時より午後9時まで(最終日は午後5時まで)

会場：森下文化センター1F展示ロビー
お問合せ：森下文化センター
〒135-0004 東京都江東区森下3-12-17
TEL03-5600-8666 FAX03-5600-8677
都営地下鉄新宿線・大江戸線「森下」駅A6出口より徒歩8分
都営大江戸線・東京メトロ半蔵門線「清澄白河」駅A2出口より徒歩8分
<http://www.kcf.or.jp/>

主催・新つれづれ草 共催・森下文化センター





ＴＶドキュメンタリー番組

「悪魔の水」のラフを描いては、少年ジャンプの角南さんの所に持っていき、細かく修正箇所を指摘され、それを直してはまた突き返される。この繰り返しをひたすら続けていたころ、シナリオライターの杉山義法さんから、ＴＶのドキュメンタリーでマンガのネタをやるので、協力して欲しいと連絡を頂いた。

私は自宅で取材を受けることになり、その当日は、自宅の玄関前にＴＶの撮影機材や大きなカメラが運び込まれ、私は奥の八畳の客間に大きなテーブルを置き、そこに描きかけの原稿をいかにも描いている途中の様に散らし、新人マンガ家予備軍の気分で、インタビューに答えた。

マンガは手塚治虫が創った、小説やＴＶドラマや映画や舞台演劇よりも優れた総合芸術だと、一生懸命に説明をした。したつもりだった。

放映されたドキュメンタリー番組を見たら、私はマンガ家志望の少年として数秒間映っただけだった。その頃、全共闘の大学生がマンガ週刊誌を、バイブルの様に持ち歩き読んでいる、マンガは子どもだけの物では無くなった、という内容が中心に作られていた。

ただその番組のタイトルが「現代マンガ考現学」で、マンガの文字がカタカナになっていた。これが杉山先生の私に宛てたメッセージだと解釈して、私は勝手に満足していた。



一九七〇年代、マンガで世界を変えられると、本当に信じていたマンガ家があった！



日本の「梁山泊」をめざして！

1970年年末、『悪魔の水』で振り込まれた僅かばかりの原稿料をつぎ込んで、中央線・高円寺駅近くのアパート「紫苑荘」に仲間たちと部屋を借りた。

つれづれ草のメンバーの一部が核になり、「ゼロプロ」と名乗り、新人マンガ家、新人デザイナー、新人写真家、新人編集者などのたまり場になった。いろいろな若い才能が集まり、日本の「梁山泊」になると意気盛んだった。

『雪どけの詩』（集英社・少年ジャンプ）『道具』（よわむし）（秋田書店・まんが王）などは、この時期に高円寺で描いた。

つれづれ草のメンバーだった田口えつお氏は、この時、秋田書店・まんが王からデビューしている。一年もたたないうちに、私はマンガの原稿料だ

けではやっていけなくなり、精神的にも行き詰まり、一人高円寺を去ることになった。



当時仲間と一緒に、出版社に年賀状を出した